

意見陳述

全国B型肝炎訴訟北海道訴訟 原告団
原告番号 467番

1 はじめに

私は、全国B型肝炎訴訟北海道原告団の原告番号467番です。今年の1月にこの裁判に加わって原告になりました。

昭和28年生まれで、現在59歳です。

札幌市内の病院で介護助手の仕事をしております。

本日は、このような機会を与えていただきありがとうございます。

私は、B型慢性肝炎の患者です。でも、私がこの裁判に参加したのは、私自身のためではありません。私の2人の子どものためです。

今日は、そのことを述べさせていただきたいと思います。

2 長女について

私は、24歳で結婚して、25歳で長男を出産し、その2年後には長女を出産しました。2人の子どもの恵まれ、私の両親からは、「五体満足の身体で子どもを授かったのだから、五体満身に育てなさいよ。」と言われました。子ども達は、2人ともスポーツが大好きで、長男は野球やサッカー、長女はバスケットボールやバレーボールに打ち込んでおり、試合があれば、よく応援に行っていました。子どもたちの成長が嬉しい、とても幸せな日々でした。

やがて長男は高校に進学し、娘も、お兄ちゃんと同じ高校に合格しました。2人が同じ制服で同じ高校に通学するのが、とても楽しみでした。

しかし、平成8年の春に、突如としてこの幸せな生活が崩れ去ることになりました。長女が、中学校を卒業した春休みに、突然体調に異変が生じたのです。長女は、体がとてもだるいようで、嘔吐を繰り返しました。

近所の病院では「風邪ですね」と言われたのですが、1週間近く経っても良くなりませんでした。

よその大きい病院を受診したところ、「すぐに入院して安静にしてください。」と言われました。入院して数日後、ドクターより呼出がありました。その席で、私は、長女が肝がんと診断されたことを告げられました。

そして、長女はすぐに、旭川医大病院に転院することになりました。

長女は、入院などしたくない、友達と高校に行きたいと泣いていました。私は、親として何もできず、ただ一緒に泣くだけでした。

長女がどうして突然肝がんになったのか、全く心当たりがなかったのですが、私の血液検査を行ったところ、私がB型肝炎のキャリアであることが分かりました。病院からは、母子感染であると言われました。長女の身体のウイルスは、私の身体からうつったものだったのです。母親として、こんなに辛いことはありませんでした。

それでも私は、娘が大学病院に入院する前に、制服、教科書、鞆などをそろえ、入学の準備をしました。たとえ入院で通学が何ヶ月か遅くなることであっても、いつか元気になってくれると信じていました。

しかし、大学病院に入院してほどなく、ドクターからは、娘の余命は3か月であると宣告されました。

娘は、がんに冒されながらも、どうしても高校に行きたいという気持ちを強く持っていました。そこで、高校にお願いしてみたところ、高校では娘の病気や現在の症状を理解していただき、全面協力をしていただき、嬉しいことに、娘は友達と一緒に、入学式に出席することができました。

入学式のあと、娘も教室に入りました。

先生から「今は体調が悪く入院しています」と説明していただいたあとに、娘は、クラスメイトの前で、大きな声で自己紹介をしました。娘は、それだけでも、クラスの一員となれたようだと喜んでいました。

入学式を終えて一週間ほど経ったころに、肝がんの開腹手術が行われました。しかし、肝がんの病状が余りに深刻で、手をつけることができないまま手術は終わったとのことでした。

その後、娘には、黄疸、足のむくみ、腹水などの症状が出てきました。何度か腹水を抜きましたが、その度に体力が落ちてゆきました。

4月の半ば頃、娘がどうしても高校に行ってみたいというので、高校の会議室をお借りして、数名のお友達とお話しする機会を作っていただきました。娘は、体力が衰えていて、制服を着ただけでも「体が重い」と言っていました。ただ、友達と会えたときは、本当に楽しそうに話をしていました。

その2か月後の6月、余命宣告のとおり、娘は帰らぬ人となりました。

3 検証会議に望むこと

私の長男も、母子感染によりB型肝炎ウイルスに感染してしまっています。幸いにして、長男は無症候性キャリアであり、現在は何の病状も出ていません。しかし、B型肝炎はいつ発症するか分からない病気です。長男も、いつ爆発するとも知れない爆弾を身体の内抱えたまま、人生を送っています。

私は、自分の体内に住み着いたB型肝炎ウイルスによって、最愛の娘を失い、また最愛の息子の身体にもB型肝炎ウイルスを住まわせてしまうことになりました。このことが母親としてどれほど辛いことか、理解していただきたいと思います。

私の悲劇は、残念ながら、決して特別なものではありません。

同じような思いをしたご家族が、何千人、何万人といらっしゃるということを、私はこの裁判に参加してみて、初めて知りました。

どうして、子どもの健康を願う親の思いを裏切る注射器の回し打ちが行われることになってしまったのか、どうして、それを40年という長い間にわたって止められなかったのか。どうして、何千何万の被害者を出すまでになってしまったのか。その原因は一体何だったのでしょうか。

私は、この検証会議において、その原因を徹底的に調べて、明らかにしてもらいたいと願っています。そして、原因が分かったら、二度とこのような悲劇が起きないように対策をとっていただきたいと思います。

それが、私が検証会議に最も強く求めたいことです。

間違っても、中途半端な調査で終わらせることがないようにしてください。それでは、また同じ悲劇が繰り返されることになってしまいます。少なくとも、この裁判の原告が十分に納得するような調査結果が出るまでは、調査が打ち切られることがあってはならないと思います。それが、この会議が負っている責任です。

私や私の母親のような思いをする人が、もう二度と生まれないようにしてください。

以上で、私の意見陳述を終わります。

以上